

カリタス女子短期大学 在学生の活躍 養よしの(2年在学)

約1年間のフランスでの留学生生活を終え、今一番思い出するのは10ヶ月を過ごした Angers、残りの2ヶ月を過ごした Lyon で出会った友達や知人の顔です。そもそも私がフランス語を勉強するきっかけとなったのがこの Angers でした。



強するきっかけとなったのがこの Angers でした。

13年前、私が小学校3年生の時、母とこの街に2週間のホームステイにやってきました。そしてその時のホストファミリーのお姉さん

がとても優しく、四六時中一緒にいたこと、毎晩夕食を庭にあるテラスで食べたこと、こんな素敵な思い出が、幼いながらも私の中にいつかまた来たい、この人達と話せるようになりたいと思わせたのだと思います。しかし、そのような思いはいつしか忘れ去られていました。

中学三年の夏、1年間フランスの普通の公立高校に留学してきた、私と3歳しか年の変わらない友達の話や、彼女の話や、フランス語を聞いていると、忘れていたフランスが私の中に甦り、フランスやフランス語を意識するようになったのです。

しかし、高校時代は部活漬けの日々を送り、フランス語の勉強はほったらかしにしてしまいました。それでも、フランス語に対する思いは変わらず、フランス語を勉強する為に大学に行くことを決めました。そして短大で本格的にフランス語を学び始め、何と Angers に留学させてもらえることになったのです。

再会を楽しみにフランスへと渡ったものの、初めはまだまだ未熟なフランス語で話すのがネックとなり、連絡を先延ばしにしてしまい、結局再会したのは3月になってからでした。ところが、「お父さんの合唱団が教会でコンサートするから」と呼ばれ行ってみると、コンサートはもちろん素敵でしたが、その後家に帰りお母さんと話していると、話が弾む弾む。もっと早く連絡すればよかったと後悔するほど、懐かしさと嬉しさでいっぱいになりました。

その後、この家族、その友達と輪は広がり、何かある度におじゃまし、一緒に出かけたりするようになりました。日本語に興味のあるご夫婦には「ちょっと質問があるから来てくれない」と呼ばれては、お昼ご飯をご馳走になり、いつの間にか夜になり、夜ご飯まで・・・と良くしてもらいました。

中でも、13年前のホストファミリーの同い年のピエールとは良く出かけました。今年の初め頃 CPE(初期労働契約法)が

問題になり大学がストライキに入った時のことです。これは26歳以下の労働者に対して適応されるもので、働き始めの2年間の研修期間中、雇用者は彼らを解雇する際にその理由を告げなくても良いというもので(この時点では)、この法の内容とド・ヴィルパン首相の強引な法の決定方法が問題となり、これからまさにこの法の対象年齢となる大学生を初めとする人々が反対運動を起し、ついにストライキとなったのです。彼の通う大学でも毎週このままストを続けるか止めるかを決める為の学生総会が行われていました。彼に「面白いから見にきなよ」と誘われ行ってみると、なんと広い体育館が飽和状態になるほどのせいと学生が参加していました。さらに代表の学生がストについて反対、賛成の立場から演説するのです。スト反対派は「私は勉強がしたい」「こんなにストが長引くと、留学生は授業を十分に受けられずに帰らなければならない」「確かに法には反対だが、反対運動だけで十分、ストの必要はない」、逆にスト推進派は「大学のストが社会全体を CPE 反対へと導いている」「これを許したらまた同じようなことが繰り返される」とそれぞれ主張していました。留学生の私は決められた時間しかフランスにいられないことに加え、すでに授業が何回も潰れてしまったこともあり、この状況が長引くのに少しいらだてていましたが、この総会でスト反対派がいて、スト推進派に負けていないのを知り、ちょっと嬉しくなり、私は表面しか見てなかったと気づかされました。

こうしているうちに留学生生活の後半はあっという間に過ぎて行き、学校も終わり、私は7・8月を Lyon で過ごす為 Angers を出ました。

Angers は、昔は要塞で飾り気のないアンジェ城や深い青色をした瓦屋根が有名で、落ち着いた雰囲気、人も心なしかおとなしい印象の街でした。

一方 Lyon には街が一望できる丘の上にフォーヴィエという教会があり、その下には淡いピンクの壁と石畳が印象的な旧市街地が広がっています。私の通っていた学校の前には Lyon で生まれたサンテグジュペリが星の王子様の像になっていたり、大きな街でした。Lyon では夏期講習を受けていたのですが、Angers よりもだいぶ南下するせいか、Angers の学校では殆んど見かけなかったイタリア人やスペイン人がとてもクラスに多く、猛暑な上にさらに暑い日々を過ごしてきました。

こうして振り返ってみると、やはり「人ってすごいな！」と感じずにはいられません。悲しくなるのも、楽しく嬉しくなるのも、いつもそこには人がいるんだなと。こんなに素敵な出会いが出来たことをとても嬉しく思います。

最後になりましたが、私の留学を支えてくださった方々にとっても感謝しています。ありがとうございました。



松嶋紀子 (1998年卒)



シャトーフロントナックを背景に

現在はカナダ人の夫、子供2人と州都ケベックシティーで暮らしています。

ケベックシティーは18世紀、仏植民地の拠点として建設されたカナダで最も歴史のある都市です。当時の歴史をそのまま閉じ込めてしまったような美しい街並み、城壁の残るこの街は世界文化遺産に指定されています。古くから仏英の戦いが繰り返され、英支配下の時代を経た今も住民の90%が仏語を母語としています。

例えば、カナダ研究の授業で「ケベック州は英語の海に浮かぶ仏語の島である」という竹中豊教授のお話を聞いたことが、私とケベックとの始まりでした。カリタス短大卒業後はケベック州へ迷わず渡航。語学学校で2年間仏語を集中的に身につけた後、ラバル大学で文学を学びました。

現在はカナダ人の夫、子

もちろん皆さんカナダ人ですから英語も上手に話しますが、仏語の中に英語が侵入することを嫌います。例えば、shoppingはmagasinage、parkingはstationnement、week-endはfin de semaineといいます。「英語の海」に囲まれ、人々は仏語を守ろう、守ろうとしながら使用してきたため、18世紀のノルマンディー訛りをも残しながらフランスとは別の形で大きく進化を遂げました。なんとフランス人でも、ケベックの仏語を完璧に理解するには半年程かかるそうですよ。ちなみに昼食はdîner、夕食はsouperといいます。始めの頃は理解するのに苦労しましたが、今では歴史を感じる素敵な仏語だと思っています。

ところで、私は国際結婚しましたが旧姓のままです。ケベック州では25年前、男女平等を訴えるフェミニズムの影響で北米で逸早く夫婦別性が導入され、現在では職場や家庭での男女平等が確立されました。確かに出産を機に仕事を離れる女性も多いですが、雇用条件に性別、年齢を表記したら違法という女性にとって何歳になっても働きやすい環境が整っています。今年の1月に長男を出産し、今は育児で手一杯ですが、将来は医療通訳として働きたいと思っています。周りのたくましい女性たちから新鮮な刺激を受け、私も負けてはいられないので子供たちが寝ている時間には辞書を片手に猛勉強です。

フランスのお菓子あれこれ

樋口仁枝 (本学教授)

パティシエということばは最近では普通に使われるようである。本専攻の受験生にあなたはなぜフランス語を勉強したいのですか、とたずねると、将来パティシエになりたいので、という返事がかえってくることも多い。フランス菓子はもちろん魅力にあふれているが、お菓子のルーツをたどってみると意外に外国から入ってきたものがいろいろあることがわかる。たとえば多くのフランス人が好む、あの軽くて甘いマカロンは1553年にイタリアのカトリーヌ・ド・メディシスがアンリ二世と結婚したときに広まったといわれている。映画の題にもなった「ショコラ」もその原料のカカオ豆は16世紀に新大陸からスペイン経由でフランスにはいつてきたものである。フィナンシエなど各種の焼き菓子は、17世紀にハプスブルグ家からマリー・アントワネットが嫁いできたときにもちこまれたウイーン菓子が普及したものらしい。

文学作品や映画のなかにもお菓子はひんぱんに登場する。ブルーストの『失われたときを求めて』にでてくる紅茶とマドレーヌにまつわる回想はあまりにも有名だ。少し前「メリ」という映画がヒットしたが、その中でヒロインがうれしそうにクレーム・ブリュレのこげた表面をスプーンでコツコツたたく場面が印象的だった。それもおいしそうだったが、あの映画の中では「ベルガモット・ナンシー」の空き缶が重要な役割を果たしていた。メリが壁の中から見つけたのは、ナンシーの特産品で、オレンジに似たベルガモットの香りのする、かわいくておいしいボンポンの入っていた缶である。

フランスの地方にはそれぞれ名物のお菓子があり、旅行のうちにそれを発見するのも楽しみである。それらは見かけは地味でも味わい深いものが多い。一時期日本でも流行ったがカヌレというお菓子はボルドー地方の名物で、その名の通り、縦に筋が入っていて何とも素朴な味と形である。ブルターニュのお菓子クイニー・アマン、これはケルト語で、クイニーはお菓子、アマンはバターという意味だそうである。イーストと有塩バターをつかい、少し塩味のあるポリウムのあるお菓子である。クグロフはドイツ語で、アルザス地方の干しぶどう入りパン菓子である。以前フランス北部を旅したとき、ランスのカテドラルのちかくで、ビスキュイ・ローズというきれいなピンク色の軽いクッキーを見つけた。友人の話ではこれはシャンパンを飲むときにかじるものだそうで、色といい味といい、なかなかおしゃれなクッキーだった。

中部フランスの田舎のシンプルなケーキにサクランボのクラフティがある。6月に、その地方ではギーニュと呼ばれるダークチェリーがたくさんとれるので、それを使ったものである。柄をとったサクランボを器に2段重ねにしきつめ、クレープの生地を注ぎ、オープンで焼き、粉砂糖をふったものであるが、季節の果物をふんだんにつかっているにもおいしそうである。これは19世紀にベリー地方で生活した作家ジョルジュ・サンドの家に代々伝わるお菓子でもあり、残されたレシピをみると、作り方だけでなく食べ方まで注文がついている。いわく「このお菓子はあついとおいしくないし、消化もよくないので、夜食べるなら朝作る。または夜作って翌日食べる」とある。もっともおいしい状態で食べるのも自然の恵みに対する敬意といえるだろう。ともかくお菓子の世界は豊かで奥が深い。



裏にレシピが記されているサヴォワ地方のお菓子の絵葉書

各務奈緒子(本学講師)

2003年に続く酷暑にフランス全土は今年7月見舞われたが、8月には一転冷夏となった。特に私がフランス語教授法の研修を受けたブザンソン Besancon は昼には気温が25度前後になる日があっても、朝晩には10度前後となり、連日の雨風に悩まされた。一ヶ月の研修後には、当初から南の方に行こうと思っていた私は、最初アルジェリア、チュニジアへと考えていた行き先を変更し、結局はまだ行ったことのない南仏へ向かった。

TGV(フランス新幹線)では、さすがツール・ド・フランスの国、自転車で旅行している家族が各々の自転車ごとTGVの一番前に乗っていた。車内では射撃のオリンピック選手という男性の横に座り、いろいろな話をした。研修中は各国のフランス語教師と話すことはあっても、普段接するフランス人は教授たちと、せいぜい店の人々ぐらいなので、フランス人と話すのはとても面白かった。

ブザンソンからTGVで4時間弱、アヴィニオン Avignon に降り立つと、日差しはそれまでとは違って夏のものだった。まずは、法王庁に立ち寄った。法王の贅沢な暮らし、権威を高めるための様々な仕掛け等、昔習った世界史を目の前にする感覚は不思議なものだった。フランスの歴史的建造物の中では時折、現代作品の展示を目にするが、法王庁でもアヴィニオンで毎年7月に行われる演劇祭の衣装が飾られていた。次に、"Sur le pont d'Avignon, on y danse, on y danse..."の歌で有名なアヴィニオン橋(正式にはPont St-Benezet)を見た。この橋は往時のアヴィニオンの賑わいを伝えるものとなっている。



次にプロヴァンス Provence の町々をつなぐTER電車で20分、ユネスコ世界遺産に指定されているオランジュ Orange のローマ劇場、凱旋門の遺跡を見に行っ

た。オランジュは小さい街であった **アンティーブの海岸(ピカ美術館)** が、ローマ劇場は当時の荘厳な雰囲気を与える堂々としたものであった。最上段にローマ皇帝の彫像、またギリシア神殿風の柱も見られた。ローマは政治への不満をそらすため、娯楽場として世界各地に同じつくりの劇場を1000近くも作ったが、現在完全な形で残るのはヨーロッパではオランジュのもののみである。

次にアルル Arles に滞在した。ローヌ川 Le Rhone の流れる古い落ち着いた町で、今回最も気に入った街の一つである。

サン＝トロフィム教会 Eglise de St-Trophime の回廊は緑に縁取られ、空は抜けるような青さであった。夜、川沿いのホテルに泊まり、夕食をとった。光に集まる羽虫が夏の終わりを告げていて、とても印象的であった。

マルセイユ Marseilles では一時間弱、駅のカフェで街の遠景を眺めた後、電車を乗り換えエクサンプロヴァンス Aix-en-Provence を訪れた。



パリ21区と言われるほどの裕福で洗練された美しい街で、

アルジェリア人の家族と

パリと違うのは、至るところにある噴水と、どこまでも続く青い空があることだ。ここでは、死後100年を記念して、セザンヌ Paul Cezanne 展を行っていた。研修前立ち寄ったパリでこの展覧会のことを知った私はぜひ訪れようと思っていたが、この展覧会は大変人気のため前売り券が必要で、当日券を手に入れるには朝8時半から並ぶようにと係りの人から言われた。次の日の朝、少し遅れて8時40分ごろ券売り場に到着した私は驚くべき長さの列に加わるようになった。フランスの人たちは、なぜかこの行列に並ぶことに対しては非常に従順で、そういえば私がパリに1年留学していた年に起こった大規模ストでも、文句を言う人はほとんどいなかった。その同じ年、パリでセザンヌ展が行われ、私もセザンヌの魅力を知ったのだが、この頃からフランスでセザンヌを回顧する試みが始まったようである。当日券の列に並んでいる途中、美術館の係りの人が一人一人に希望枚数を聞いて回っていたが、人々は「なんていいシステムだ」と感心していた。私にしてみれば、1時間ぼーっと待つのは何とも遅れているとしか思えなかったのだが、当日券は1000枚あるとかで10時過ぎには券を手に入れることができた。

次に訪れた地アンティーブ Antibes は、カンヌ Cannes とニース Nice の中間に位置するコート・ダジュール Cote d'Azur の町である。ピカソ美術館があるが、残念なことに工事のため閉館中であった。ここで初めて地中海で泳いだ。水は冷たく、少し海に入っただけで温まるという感じであったが、今回行けなかったアルジェリア出身の家族と親しくなった。またホテルではノルウェーのご夫婦と仲良くなった。これも旅の醍醐味である。

最後マルセイユにも立ち寄りたかったが、また別の機会ということにして、寝台列車でパリへと向かった。新学期のパリはもう既に秋で、南仏の夏の格好の私は異邦人であった。

“ フランス語であそぼ ”

仏語・仏語圏文化専攻は、7月の横浜フランス月間に登録した企画「プレ・フランス語であそぼ2006」に引き続き、8月26日に、「フランス語であそぼ2006」を、開催いたしました。本専攻の教員の他にも、カリタス小学校の麻田美晴先生や元小学校講師のクロード・ロベルジュ上智大学名誉教授等がお手伝いくださいました。フランス、カナダ、ハイチ出身の animateurs に囲まれて、小学生10名が、歌ったり、ゲームをしたりするなか、保護者の方々も参加されました。一方、お母さま方は、本学カフェテリアの荒木恵美調理師の指導で、シフォンケーキの作り方を学び、充実した半日を過ごされました。



クロード・ロベルジュ上智大学名誉教授と小学生

パサージュ()

甦るパサージュ

稲葉延子 (本学教授)

| 名称(仏) | 建設年 | 所在地 |
|---------------------|------|--|
| passage des princes | 1860 | 5 Boulevard des Italiens 17 rue de Richelieu |

パサージュとは、「都市に見られる両側に商店が並んだガラス屋根で覆われた歩行者専用の抜け道」です。

今回ご紹介するパサージュ・デ・フランスは、1860年に作られました。パサージュが雨後の竹の子のようにできたと言われる二つの時期(1823年から1828年、1839年から1847年)にはかなり遅れていますので、技術の



発展とともに、天井も高く、幅も広く、美しいロトンドを含め、豪華な雰囲気のあるパサージュです。1994年に、ギャルリ・ヴィヴィエヌのように、全面改装して生まれかわったこのパサージュは、新装開店とばかり、パサージュの定番の店、アクセサリ

ー屋、美容院、宝石店、レストラン、カフェバーなどが入りました。その後2年足らずであっという間に、これらのテナントは撤退します。テナント料が高すぎたという専らの噂でした。ライトが照らす無人の夜間のパサージュは、鍵がかけられることもなく、文字通り「歩行者専用の抜け道」としてその存在理由を見出し、私もその美しい抜け道を2000年在パリ時代に、



毎晩のように使いました。通り抜けるたびに、「ああ、もったいない」と思いながら。こうして毎年パリに行くたびに、通り抜けては、このパサージュの行く末を案じていましたが、数年後ようやく、大通りに面していながら幽霊屋敷だったこのパサージュは、おもちゃ屋さんが並ぶパサージュとして甦りました。



そもそも、1994年に新装開店した際、どのパサージュでもおなじみの劇場がありませんでした。もちろん、数十メートル先には、パサージュ・デ・パノラマ、ということは、その先には、テートル・デ・ヴァリエテがあるわけですが、このパサージュ・デ・フランスの入り口脇には、大きなゲームセンターがあるのです。ゲームセンターがBoulevard des Italiensに面した正面の顔であるなら、そこから入って、タイムスリップしたようなロトンドを鑑賞したり、宝石に魅せられ、お茶をするというのには無理があったのでしょうか。

今度こそ、ゲームセンターとおもちゃ屋のコンビネゾンが成功しています。これも21世紀のパサージュの一つの生き方かもしれません。

Information

細野一芳 (1997年卒)

PAR AVION EXPOSITION

-La rencontre-

Kado cafeにて写真展を

行なっております。

是非お立ち寄りください。

詳細は下記HPをご覧ください。

<http://katuavion.hp.infoseek.co.jp/>

2006.10.7 ~ 10.29 (10・16・17・23 休)

Adresse:

東京都世田谷区奥沢 7-13-13

TEL : 050-1561-6791

pm12:00 ~ pm20:00

HP : <http://kadocafe.michikusa.jp/>

東急東横線・東急大井町線

【自由が丘駅】徒歩8分

東急大井町線【九品仏駅】徒歩5分



[編集後記]

嬉しいことに、「liaisons を読んでいます」という卒業生の声が、最近聞こえてくるようになりました。さて今回は、リヨンから帰国したばかりの蓑さんに、派遣奨学生としての滞在記を、海外からは、フランス語圏カナダ・ケベックに住む卒業生松嶋さんのお便りを。細野さんの写真展はフランス留学時代の出会いをテーマにしています。また、各務先生は今夏、フランス政府奨学生として教員研修のために渡仏、その後旅行された南仏の旅の思い出を綴っていただきました。樋口先生は patisserie amusante のクラブ顧問、お菓子の情報満載です。横浜ふらんす月間は、次年度も続きます。『横浜・フランス、とえば、カリタス』となりますように。(稲葉)

カリタス女子短期大学 言語文化学科 仏語・仏語圏文化専攻

URL:<http://www.caritas.ac.jp/france/>

携帯サイト:<http://www.caritas.ac.jp/i/>

MAIL: inaba@caritas.ac.jp



Liaisons フランコフィルのための情報誌

第4号 2006.10.13

発行人 : 稲葉延子 (仏語・仏語圏文化専攻主任)

編集責任 : 稲葉延子

編集協力 : 内田香織

